2005/10/31　独立行政法人　医薬品医療機器総合機構　職員研修会

ＭＭＲワクチンによる被害の実態

ＭＭＲ被害児を救援する会　　上　野　秀　雄

１　娘の花の誕生から発症前日までの成長と生活の様子

(1) 平成元年６月２９日　３人兄妹の末っ子として誕生

(2) 高いところから飛び降りたり鉄棒にぶら下がったり，運動が大好きで明るい子どもに成長。

(3) 風邪をひきやすく喘息気味であったが，多少ぜーぜーする程度で元気に過ごしていた。

(4) 発症前日も夜まで元気に遊んで眠った。

２　発症当日から急性期の治療の経過と症状

(1) ５月８日朝（ＭＭＲ接種から２週間後）大汗をかいているのに気づく。ぐったりとして様子がおかしいので，近所の小児科（ＭＭＲ接種医）で受診。高熱，意識不明，痙攣発作。

(2) 県立病院に転院し治療を続けるが，ライ症候群の疑いで東北大学病院に転院し，人工呼吸器を取り付けられ交換輸血や様々な治療を受ける。

(3) どうにか危機を乗り越えたが，急性脳症により大脳細胞のほとんどが破壊され，心身共に重度の後遺症が残ってしまった。

３　ＭＭＲ接種の経緯

(1) その当時はすでにＭＭＲによる無菌性髄膜炎の多発などの副作用が報道され，親としてはＭＭＲを接種させるつもりはなかった。

(2) はしかの予防接種をと，（両親共働きのため，）花を祖母につれていってもらったが，小児科医から意に反してＭＭＲを接種されてしまった。

(3) この小児科医は，ＭＭＲを積極的に接種しており，他にも進められて接種したという話を聞いている。

４　ＭＭＲの開発から中止まで

(1) 別紙　ＭＭＲ関連年表　を参照

５　治療中から現在までの家族と花の状況

(1) 母親は，勤務を休み，大学病院に４ヶ月，その後のリハビリのための病院に３ヶ月，合わせて７ヶ月間家に戻らず，つきっきりで看病することとなった。

(2) 父親は，急性期には週２回，片道約200㎞の道のりを病院に通った。

(3) 花の兄と姉は，母親がいなく父親もいないことが多いので，この間は祖父母に世話をされた。

(4) 退院して家に戻っても，花の世話や通院などのため，母親は結局退職せざるを得なかった。

(5) 花を療育施設に通わせたいということと，父親の転勤のため家族５人で現在の花巻市に転居。

(6) 転居してもリハビリのため，毎月仙台に通う。（花の姉の病気のために通えなくなるまで。）

(7) 療育施設への母子通園，養護学校の訪問教育・通学と，花を取り巻く人々とのふれあいの中で，少しずつではあるが，家族の識別，周囲の認識，感情の表現など，成長を実感している。

(8) 現在，養護学校高等部１年。

６　被害認定申請から認定までの経過と認定後の行政の対応

(1) 別紙　ＭＭＲ関連年表　を参照

(2) 市は迅速に対応してくれ，予想以上に早く認定された。当時の厚生省の姿勢の変化のせい？

(3) 認定後，毎年，担当課長や保健婦が訪問して様子を見に来ていたが，裁判を起こしてからはこなくなった。現在は，事務的に手当を送金してくるだけである。

７　これからの生活の不安

(1) 重度の心身障害を負っても，身長・体重は順調に成長し，介護が重労働になってきている。

(2) 体の成長に伴い，体幹の側湾曲，呼吸機能の低下など，健康上の不安が増大。

(3) 家族や親（介護者）の病気・事故などで，花を介護できなくなる不安。そして…